

JICA 青年海外協力隊として中国へ

四辻可苗さん

よつつじ・かなえ（29歳）＝笹川＝



人がめったにできない経験ができるチャンス。つらいことも、楽しいこともいろいろな経験を積みみたい。

「わたしを通じて、中国人に日本を好きになってもらいたい」

国際協力機構（JICA）が、日本政府の国際協力の一環として実施している青年海外協力隊。その平成21年3次隊として笹川の四辻可苗さんが、中華人民共和国安徽省に派遣される。能登町出身者としては、4人目の協力隊員となる。

日本語教師という選択

もともと語学の勉強が好きだったという四辻さん。高校卒業後は大阪府の外国語大学に進学しトルコ語を専攻した。大学時代はトルコ共和国に1年間の語学留学。そこで日本との格差を目の当たりにしたという。「日本に帰ってきて、豊かな日本を還元できないか、何か役に立たないかと考えるようになりまして」と国際協力へのき

っかけを振り返る。

大阪で民間企業に就職してからも、その思いはさらに大きくなる。そして25歳の時、自分ができる国際協力への道として、日本語教師を目指すことを決意した。

「日本語教師は語学が好きで自分の性格に合っているし、これから先、世界中のどこでもで



12月16日にJICA 北陸支部長らと持木町長を表敬訪問。持木町長から「体に気をつけて頑張ってください」と激励を受けた

きる仕事だと考えました。働きながら日本語教師の資格を取ることが想像以上に大変で、1年半学校に通いました」

資格を取得した四辻さんは、学んだことを忘れないため、スキルを高めるために、日本語教室でボランティアを始めた。

「地域の公民館や文化センターなどでの日本語教室に参加しました。少しずつ上達していく外国人生徒を見ていると素直にうれしくて、教えることに達成感を感じるようになりました」

早く中国に行きたい

日本語教師としての経験を重ねた20年秋。四辻さんは青年海外協力隊へ応募する。「現地で外国人と直接ふれあい、共に成長したい」という思いだった。

派遣希望先の第1希望は、一度訪問したことがあるタイ王国。しかし、派遣先は日本語教師の要請が最も多い中国と決まった。

「最初は残念に思いましたが、JICAの顧問から『中国に行

くことが、必ず将来の自分のためになる』と言われて考えを改めました。今は早く中国に行きたいという気分です」

JICAで2カ月間、中国語の訓練を受けた。「中国語はまったくの初めて。簡単な日常会話はできるようになりましたが、イントネーションが難しいですね」と苦笑いする。

ピンチはチャンス

モットーは「ピンチはチャンス」。きついつき、つらいつきこそ自分を高めるチャンスだと考えている。

「人がめったにできない経験ができるチャンス。つらいことも含めて、いろいろなことを経験して、自分がどう感じるか楽しみです。さらに学習者や任地の人たちにとっても、わたしの出会いが何らかの『チャンス』になるよう頑張りたいです」

今、夢への大きな一歩を踏み出す四辻さん。その輝く大きな瞳は、これからもずっと前だけを見続ける。

JICA 青年海外協力隊
自分の持っている技術・知識や経験を開発途上国の人々のために生かしたいと望む青年を派遣するJICAの事業。期間は原則2年間で農林水産や保健衛生、教育文化など8部門120種にわたる。11月30日現在、世界75カ国に約2400人が派遣されている。



中華人民共和国 安徽省
華東東部に位置する人口約6700万人の内陸省。省都の合肥市は、中国科学技術大学、合肥工業大学、安徽大学などを擁し、北京に次ぐ一大科学技術教育拠点。
四辻さんの配属先は合肥市にある安徽中澳職業学院。安徽省とオーストラリアのTAFE学院が創立した専科の大学で、学生数2000人、4つの学部と18の学科がある。

中学生人権作文コンテスト 人権について考えるきっかけに

12月8日、平成21年度の中学生人権作文コンテスト表彰式が能都庁舎で行われ、入賞した5人と学校表彰を受けた3校が出席しました。入賞した皆さんは次のとおりです。

〈石川県大会入賞〉北澤礼衣（能都中3年）、小島夕紀恵（同）
〈輪島地区審査会入賞〉岩住彩加（柳田中3年）、四方和寿（小
木中2年）、元平菜月（松波中2年）
〈学校表彰〉柳田中学校（人権擁護局長・全国人権擁護委員連
合会長感謝状）、鶴川中学校・小木中学校（金沢地方務局・
石川県人権擁護委員連合会長感謝状）



入賞した皆さん（前列が個人表彰）

花束を受け取る日下さん



日下さんとさん 100歳 命を見守り続け、迎えた100歳

日下さんとさん＝宇出津＝が11月30日、100歳の誕生日を迎え、持木町長が日下さん宅を訪れました。持木町長が「これからもお元気で」と賞状や花束を手渡すと、日下さんは「もったいない。ありがとう」と笑顔で話していました。

日下さんは21歳で助産師免許を取得。昭和23年からは「宇出津郷産婆会長」として、命の誕生に携わってきました。80歳ごろまで木浴指導などに出ていたという日下さん。家族は「仕事柄食べ物には注意していました。よく働いたことが長生きの秘けつではないでしょうか」と話していました。

施設を清掃する奉仕団の皆さん



小木デイサービスセンターで清掃ボランティア 日赤奉仕団内浦支部が施設清掃

12月17日、赤十字奉仕団内浦支部（高木米子支部長、会員37人）が、毎年恒例となっている小木デイサービスセンターの清掃ボランティアを行いました。この日は高木支部長をはじめ14人の会員が施設を訪れ、手際よく作業を行いました。

日赤奉仕団内浦支部は昭和63年3月に設立され、23年以上にわたって清掃ボランティアやチャリティーバザーなどの活動を行ってきました。高木支部長は「会員一同『させていただく』の精神で頑張っています。毎年快くボランティアを受け入れてくれる施設の皆さんに感謝しています」と話していました。

暮れのアエノコト

一年の収穫を田の神様に感謝

昨年9月にユネスコ無形文化遺産に登録された「奥能登のアエノコト」。田の神様をもてなし1年の収穫を感謝する暮れのアエノコトが12月5日、柳田植物公園合鹿庵で実演されました。

植物公園には町内外から約100人が訪れ、主人役として神事を仕切る田中登さん＝小間生＝の言葉や動作を真剣に見入っていました。アエノコトは奥能登だけに伝わる農耕神事で、この日もてなしを受けた田の神様は、厳しい冬を家族と共に過ごし、2月9日に田んぼに帰ります。



▲「今日はアエノコトです。お迎えに上がりました」と田んぼから田の神様を迎える田中さん



◀ユネスコ無形文化遺産登録後最初のアエノコトには、多くの報道陣も詰めかけました

金沢星稜大学西村ゼミ ブルーベリー園で農作業に汗

金沢星稜大学の西村千恵子教授のゼミ生17人は昨年11月23日、当日の駒寄農場を訪れ、町の特産であるブルーベリーの木の根元にチップを敷く作業を体験しました。体験型地域貢献学習の一環で、西村ゼミの本年度の来町は8月に続き2回目です。駒寄農場は、筑波大学の教授によって昭和58年に能登町で初めてブルーベリーを導入した場所として知られています。農場を経営する駒寄美和子さんから作業の手順を教わると、男子学生が一輪車でチップを木の根元まで運び、女子学生は手分けしてくま手で回りに敷き詰める作業を行いました。



木の根元にチップを敷き詰める学生たち

石川地域づくり表彰 地域の活力を生む活動に表彰

住民主体でまちづくりに取り組む団体・個人を表彰する石川地域づくり表彰は昨年11月22日に七尾市で開かれ、能登町から個人の部に数馬嘉雄さん＝宇出津＝が入賞、団体の部では小木地区壮青年連合会が優秀賞に輝きました。

町商工会長である数馬さんは、「いしり」のブランド化・販売促進に尽力。連合会は外国人留学生や大学生などを地域で積極的に受け入れ、「とも旗祭り」や「袖ギリコ祭り」などの伝統継承に力を入れています。同月24日には、数馬さんと連合会の新村正人さんから3人が持木町長に喜びを報告しました。



持木町長に受賞を報告し、今後の展望を語る数馬商工会長

水門が開められ、ダム湖に水がたまり始めました



北河内ダム試験湛水式 ダムの安全な運用を目指して

平成7年に本格的な工事に取りかかって15年、昨年11月にダムの堤体と天端橋梁工事が完成した北河内ダム。12月1日は、完成したダムの安全性を確認するため、使用する前に試験的に水を貯める試験湛水が行われました。

関係者らが玉串を捧げ、ダムの安全や有効利用を祈願した後、水門が開められ試験湛水が開始されました。

試験湛水は今年1月末までに満水にし、漏水や斜面の安全性などを点検して3月末には終了する見通しです。そして6月から運用を開始する予定になっています。